

聞き取り調査から描きだされる伊是名の民家の空間図式 (民家の一番座・二番座と雨端に注目した住空間の特徴)

Exploring Spatial Schema and the Characteristics of Folk House in Izena Village, Okinawa through the Interviews to the residents (A Study of Characteristics of Folk House Dwelling Spaces focusing on Ichiban-za, Niban-za, and Amahaji.)

篠崎 健一†, 藤井 晴行‡
Kenichi Shinozaki, Haruyuki Fujii

†日本大学, ‡東京工業大学
Nihon University, Tokyo Institute of Technology
shinozaki.kenichi@nihon-u.ac.jp

Abstract

This paper aims to discuss the characteristics of spaces and spatial schema extracted from traditional folk house and the life lived in it, in Izena village, Okinawa, Japan. The study focuses on the spaces called “Ichiban-za”, “Niban-za”, and “Amahaji”, which are important components of the traditional folk house, and plays essential role in the ordinary life of the residents.

The process of collecting narratives of the residents and of experiencing the life in the village are discussed in detail.

Through the analysis of 12 narratives (out of 20 narratives collected through the dialogs with the residents), the authors found the characteristics of the space such as “expansion of space territory of Ichiban-za: a schema of a concentric circle”, “homogeneity of Ichiban-za and Niban-za”, “inherent characteristics of Niban-za, and its space continuity out to the front yard of the house”, “change of characteristics of borders of the house”.

Keywords — Spatial Schema, Narrative, Embodiment, Experience, Characteristics of Space, Folk House, Izena

1. はじめに

本稿は、沖縄本島北方の離島、伊是名島伊是名集落において、集落の民家に住む人びとの語りから、伊是名の民家にそなわる空間の特徴を抽出し、彼らの認識を方向づける空間図式を議論しようとするものである。特に本稿では、沖縄、伊是名の民家の最も基本的な伝統的空間構成とされる一番座、二番座、と雨端に注目して探究を進めている。

この研究は、集落における生活の経験の表現を写真日記と写真 KJ 法により構造化して原型的な空間図式を抽出しようとする試み（篠崎・藤井ら 2015）ほかの延長にある。筆者らは、フィールドにおける経験の表現から空間図式を抽出し表現する試みと、その方法の検証を繰り返し、フィールドに存す

る豊かさを如何に研究室に持ち込み、発見的なプロセスで探究するかを議論している。実験的手法によりターゲットを絞った結果を得るのではなく、無駄は多くても、何か仮定するありそうなことがらを、手探りで見つけようとする、野科学 1) 的な探究姿勢を大切にしている。

このような探究の仕方は、建築の設計者である筆者の経験から述べれば、よい、未だ見ぬ建築空間をデザインする探究の仕方と、とても似たプロセスである。それは創造的であり発見的である。



図1 伊是名の地理・集落風景

言葉・生活行為・空間構成

集落や民家は、常に動きのなかにあり、生活は変化する。伝統的な生活の仕方や空間の構成は、時代を経ても変化しない、あるいはかたちを変えて継承されるものごととや、時代に従い変化するものごとがある。

筆者らは、生活者の語る言葉から、なんらかの方法で、言葉、生活、空間構成の関係から抽出されるであろう原型的な身体的空間図式を探究することによって、空間の認識の身体的原型性に迫ることができないかと考えている。

1.2. 民家の一般的特徴・伊是名

沖縄、伊是名の民家は、珊瑚やコンクリートブロック積みの囲繞（敷地囲いなどと呼ぶ）に囲まれ、主屋、付属屋、外部空間とともにその生活がある。木造の柱と梁による開放的な家のづくりで、雨端と呼ばれる奥行き半間ほどの軒下空間が、強い日差しや雨を遮りながら通風を確保する。座敷は南面し、東から一番座、二番座と呼ばれ、北側の私的な空間に対し表の空間とされ、接客や家族の集まり、先祖を祀るなどの生活行為がおこなわれる。かつては、座敷のある主屋と竈のある炊事場が別の棟であったとも言われている。伊是名島は、沖縄の伝統的な生活と、信仰や歴史のつくる特別な空間性が残る、場所自体に身体的感覚のある興味深いフィールドである。

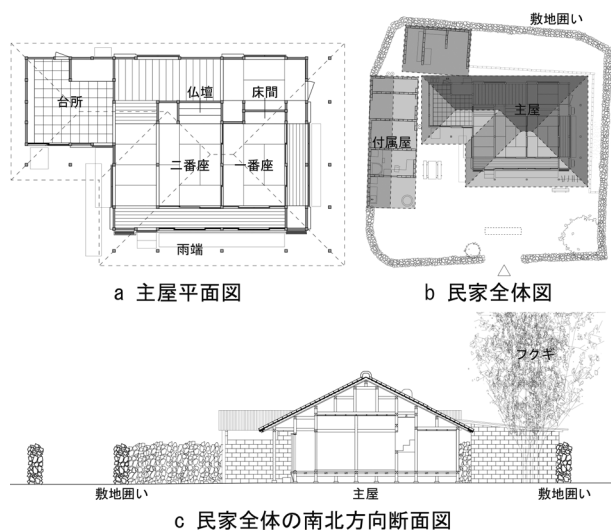


図2 伊是名の民家の実例

2. 空間の認識・研究の方法

生活者の、さまざまなレベル、内容や強度の空間認識を語りとして取りだしたい。そこで、

- 1) 多様な語りを集める
- 2) 語りを解釈する者の生活の身体的経験を高める
- 3) 語りの分析（解釈・考察）の仕方を工夫することが大切であると考えた。

1) 多様な語りは、会話の志向を限定せずさまざまな語りを導くよう、意図的な操作や誘導を排除することから得られる。このため、語りの採取は、生活者が実際に生活する民家でおこなうことにこだわった。生活の邪魔をしないよう配慮しながらも、生活の場というリアルなフィールドに身を置くことで、眼前の空間やものが語りを深め、ディテール

を明らかにし、語りを発展させることを目論んだ。同時に、語り手の生活についての、筆者らの理解を助けると考えた。さらに、生活の経験の獲得と語りの採取を、同時進行させることで、両者のインタラクションを期待できると考えた。

2) 語りの解釈は、聞き手であり解釈する者の身体的な生活の経験に依存する。このため、筆者らは1年半にわたり継続的に伊是名集落を訪れ、さまざまな仕方集落の生活を経験してきた。

異なる主題をもつ調査、研究を並行して進めることや、祭りのように大勢の村の人びとと体験を共有すること、語りの採取や日常の生活で人びとと対面して話すこと、一人で集落空間を散歩したり、集落や民家について考えたりすることなどで、生活の経験を積み重ねようとした。表1に1年半の伊是名訪問の履歴を示した。

3) 語りの分析の工夫は、語りは、聞き取る者の解釈なしに理解されないことを、研究者自身が意識し、語り手の言葉があらわす何かや、語りの中にあるかもしれないもの、聞き手の理解が及ばないゆえに未知かもしれないものごとを、如何に獲得するかの方法を工夫することである。

韓国の現代文学作品のテキスト分析から、韓屋の空間構成と住生活の特徴を論じた研究（金・高田, 2015）は、作品に表現されたテキストを丁寧に解釈しているが、その根拠を明示し解釈のみちすじを明らかにすることによって、解釈の再現性を担保して、対象に対する理解の共有することを可能としている。

本研究においても、このように何らかの明示的なプロセスを経ることで、議論を深められないかと考える。

表1 伊是名集落におけるフィールド調査履歴

1) 2014.9.15.-18.	民家立面、敷地囲いの材料 悉皆調査
2) 2014.11.1.-4.	民家構造の確認 悉皆調査
3) 2014.12.23.-26.	実測・聞き取り調査（伝統12民家+1民家）
4) 2015.3.16.	調査報告発表会、懇親会
5) 2015.8.6.-11.	豊年祭参加、1)~4)の追調査・補足
6) 2015.9.15.-18.	空き家、空き地に関する調査
7) 2015.10.9.-12.	実測・聞き取り調査（伝統7民家）
8) 2016.3.17.-23.	調査報告発表会、懇親会 実測・聞き取り調査（伝統6民家）

3. 語りと経験の身体性

3.1. さまざまな語りを集める

民家での語りの採取の例を図3に示す。図は、実際に調査した民家（A家）の様子である。様々な語りの採取の場面をひとつの図面の上に描き、あわせて採取した語り（部分）も記した。

台所の床の変化を説明する(a)、外部空間と関係する生活の様子を語る(b)、台所の火の神（ヒヌカン）について語る(c)、南の庭でかつてのヒンプンの位置を説明してくれた(d)、三番座の開口部を指

しながら、そこでの生活の様子を説明する(e)、一番座へ移動し、縁側や雨端について語る(f)、一番座と二番座の間で、二つの座敷での生活を語り(g)、裏座にあった暖をとるジュールという火鉢の大きさを手で示す(h)、裏の豚小屋の建設経緯を語る(i)、そして台所で長い間立ち話をして、過去の生活を回想しての心情を語る(j)、というように、座敷に座ったややフォーマルな語りとともに、民家の内外の空間を移動しながら、生活と一体となった多様な語りを聞かせてくれた。

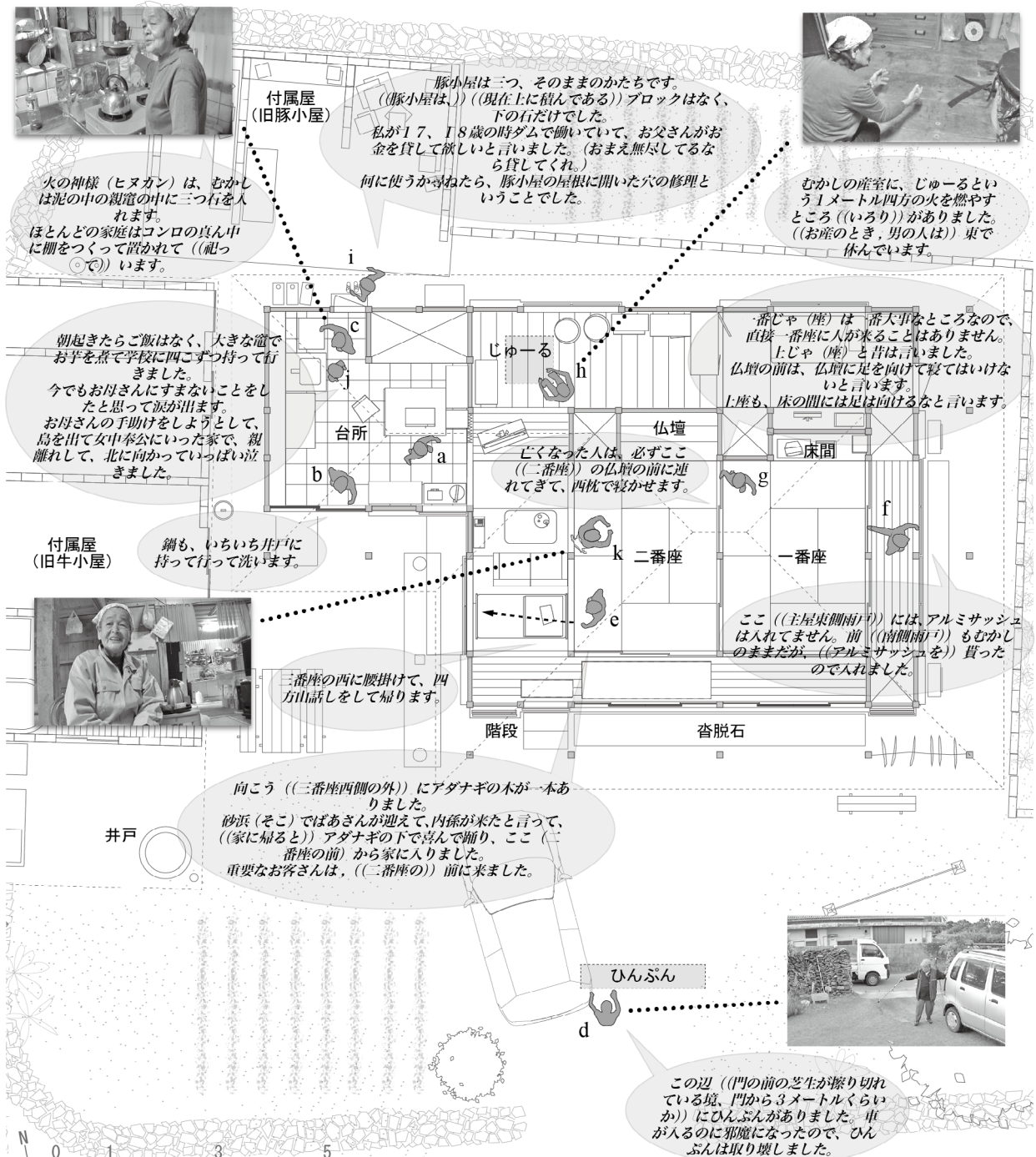


図3 民家での語りの採取の様子

3.2. 集落の生活の身体的経験の向上

図4は、筆者らの具体的な生活の経験の断片を示したものである。

再生された古民家に投宿し、自炊し、集落の人びとと交流した。集落を歩き廻りひたすら民家と集落空間を見て歩き、民家の実測調査をし、生活者の語りを採取した。年度末には毎年、報告会と懇親会を催し、毎回、予想を超える村の人びとの反応があった。その経緯から、集落の最も大切な伝統行事で

ある豊年祭にも参加させてもらうことができた。

ウンナーと呼ばれる豊年祭は、毎年、米の収穫のあとに催される。綱引きは祭りの一部で、その年の稲藁を集落総出で大きな縄に結って行われる。綱引きは、東（アガリ・アガリンドウ）と西（イリ・イリンドウ）の対戦で、集落の神の宿る場所や、その年慶事のあった家を廻り練り歩くムラガーイという行事を行った後に、公民館の前で行われる。祭りの準備から行動をともし、当日のすべての行事にイリンドウのメンバーとして参加した。（図4のウ



集落を歩き回る 第1回調査

【事実】島の5つの集落を歩き廻り写真日記を書き留めた。民家一軒一軒を観察し、石垣や民家の構造、屋根材料といった基礎的な空間情報を収集した。【経験】実際に集落を歩くと、文献などに学んだ沖縄の民家の特徴を理解するが、それ以上にさまざまな改変や、一見無秩序にも見える民家各戸の違いを認めた。それでも何か共通するものがあるのではないかと、考えながらなお歩く。



梅干しの差し入れ・診療所 第1回調査

【事実】前夜、島の夕食を作ってくれたお母さんが、翌朝、体調を崩して寝込んでいた学生調査員のために、梅干しを差し入れてくれた。車で島の中を探した末に、我々を見つけてくれた。【経験】その後、村びとの語り、病に倒れヘリコプターで那覇に運ばれ…（S家など）、と何度か聞いた。この学生のおかげで、島の診療所には内科と小児科しかないこともわかり、島の人びとの健康について、リアリティーがわいた。



いひやじゅーて★ 第3回調査

【事実】二番目に訪れた民家（B家）。仏壇の前の二番座前の縁側にいつもお茶の用意がされている。二番座・一番座の欄間や鴨居の上の小壁には、先祖の写真が多数飾られているが全て裏返しになっている。ご主人を訪問の三週間前に亡くされたという。【経験】この人（亡くなったご主人）が、来る人を受け入れたら喜ぶだろうと思う（B家）と考えて調査に協力して下さった。



ときわでの語り 第3回調査

【事実】ときわは、調査の度にお世話になる民宿である。古い民家で、語りも沢山聞くことができた。ときわは新築当時、今、モデルハウスというのがあるように、伊是名で一番モダンな家だった（O家）、という。珍しく、ガラス戸が雨戸とともに設えられ二重の開口部で、雨端がなかったという。【経験】写真は、家の外側と一緒に見ながら語りを聞いているところである。



てらじやな★ 第3回調査

【事実】語りを聞きに伺うと、必ずと言っていいほど、何かもてなしをしてください。縁側に佇む。【経験】てらじやな、という伊是名で採れる美味しい貝を知った。これが病みつきになる。この写真は、二番座が縁側、雨端を経て庭へと連続し、来訪者と住む人が、雨端、縁側の空間で出会うという空間の特徴をよくあらわしている。



漁船での渡り 第4回調査

【事実】いつも乗るフェリーが舵の故障で運行不能となり、隣の伊平屋島へ渡り、バス、漁船を乗り継いで島に辿り着いた。海も荒れ、我々は酔うなどしたが、たまたま一緒になった伊是名の子どもたちは、平気でゲームに興じていた。【経験】遅しさ。大らかさ。なんくるないさ（なんとかなるさ）。村の人びとは、フェリーの故障を知って、我々が来ないと思っていた。



報告会 第4回調査

【事実】村内放送で、直接、来たことをお知らせした。大勢が集まってくれた。個人情報に配慮して、調査民家の名前を伏せて発表していたが、聴衆から、誰の家か教えて欲しい、みんな家を全部知ってるから大丈夫さ、という声が上がリ、結局全てをあからさまにして発表した。【経験】やはり大らかな、村がひとつの家のような感じを受けた。みなさんをもてなすつもりで「いひやじゅーて」とタイトルをつけたが、結局我々がもてなされた。



懇親会 第4回調査

【事実】報告会に続き、踊り唄い、食べ飲んだ。賑やかさは、予想以上だった。様々な話を聞くことができた。若者がさっさと働き、場を作り、片付けるなど、同じ場を共有するための、年齢による仕分けが無言の中にできている様子が見られた。【経験】お手紙くださって嬉しかった、これは行かなきゃ、と思った（A家）などと言ってくれました。誰もこないとみなさんがかわいそうだと感じて来た、などという方もいらした。



懇親会翌朝の朝食 第4回調査

【事実】前夜の懇親会の深酒で、まだ公民館の舞台上で寝ていた我々に、朝早くお母さんのどなたかが、袋一杯の食べきれないほどのサーターアンダギー（沖縄独特の揚げ菓子）を差し入れて置いて行って下さった。【経験】ありがたく、伊是名ビーチに出たかった。飲み過ぎのお腹には、とてもありがたい朝食であり、集落のほっとする空間でもあった。

図4a 集落の生活の身体的経験 1

ンナーの経験の断片に☆印をつけた.)

いひゃじゅーてとは、お茶と茶菓子で、誰彼を問わず訪問者を歓待する慣習であり心である。伊是名島で広く行われていたが、今は伊是名集落に特徴的な生活の経験になりつつある。民家の二番座の縁側に、茶盆が常に置かれ、通りかかった人が自由に縁側に腰掛けてお茶をいただける。家によっては、雨端に椅子が用意されている。調査に何うと、一通りのすべきことが終わって、この縁側や二番座でもてなしを受けることが多い。このような伊是名の民

家に特徴的な空間の体験は、集落の経験を深める。その時の語りもまた大切である。(図4のいひゃじゅーての経験の断片に★印をつけた.)

三線に合わせて唄い踊った。気象条件や船舶機材の故障で予定通り島に渡れないことも何度も経験した。村役場の人びとや郷土資料館、集落の大工さんらにも話を聞かせてもらい、伊是名島を活性化させようとするNPOの話も聞いた。

これらの経験が、どのように研究者らの認識を深め、広げ、そのことが本研究の目的に沿って、どの



地区ごとに綱を結う ☆ 第5回調査

【事実】班ごとに作業場所がある。大きな木の枝を利用して、3人一組で綱を結う。何日も前から結始め、綱引き当日に、公民館前で、班ごとの成果を合わせて大きく綱にする。【経験】綱を結う3人は若者で補助する3人は経験豊富な村人で、腕力と知力を住み分け、結い方の指導をしながら作業をしていた。世代を経て、祭りが継承されていくと感じた。



銘苅家殿内の祠 ☆ 第5回調査

【事実】東(アガリ・アガリンドウ)のムラガイイで、この大切な場所、空き地の小さな家のような、しかし無人の建物、にも奉納を捧げる。【経験】この豊年祭での体験をきっかけとし、また第6回調査時の観光ガイド養成ツアー同行で郷土資料館の方と一緒に、この小さな祠のようなものは、本家の家の建物がなくなっても、その場所に先祖を祀るとわかる。



神アシャギでの踊り ☆ 第5回調査

【事実】三線の先導で集落の神の居る場をめくり奉納の踊りをする。【経験】神アシャギの敷地にやすやすとは入れないという意識を持っていたが、村びとらはいとも簡単に境界を超えていく。人びとの生活がそれらの空間とともにあることを実感する。一方で、大切な神聖な場として扱うのかと思いきや、空き缶やペットボトルの殻が、石垣に置かれ残されているという生活のリアルな側面も見た。



民家への訪問・二番座の空間 ★☆ 第5回調査

【事実】民家は、訪問者を迎える。お酒(泡盛・ビール)、水、食べ物(おにぎり、果物など)、子どものお菓子などがふんだんに用意され訪問者はそれらを頂く。民家の住民、訪問者が入り乱れて、民家の庭先で踊り一斗缶を打ち鳴らしラッパを吹き鳴らす。【経験】民家の住民は、二番座の戸を開け放ち訪問者を迎える。訪問者は、敷地囲いの中に二番座の前に三線が中心を作り、踊りの輪を広げる。



東廻りと西廻りの出会い ☆ 第5回調査

【事実】ムラガイイの後、綱引きの前にスナイという騎馬戦のような戦がある。相手を板から落とす。【経験】担いだ、落ちてても何度も這い上がる。それを支える文字通り、集落の人と触れ合うこととなる。属する人数を同じくするため、東西の分け方は、時に応じて変化するという。筆者らは、厳格な東西の分け方が踏襲されているのではないかと想像していたが、そうではなかった。



見守る村の長老(高齢者)たち ☆ 第5回調査

【事実】少し離れているが、大きな木の下に、長老(高齢者)たちのための席が設けられている。皆そこに集まり祭りを楽しんでいるようである。【経験】村の人びとの高齢者を大切にしている様子が感じられる。報告会と同じように、同じ場を共有しながら、世代や年齢による、参加の仕方の分担がなされていると感じた。柔らかくもしっかりとした人びとの生活の仕組みがあると感じる。



爆風で家が傾き壊れる 第7回調査

【事実】朝鮮動乱の時に、B29が部落の西側の方に落ちて、その時の爆風で家が10センチ傾いた。爆風で壁が全部なくなったので、家を全部直した(R家)。これをきっかけに屋根が急速に葺き替えられていった、とも言われている。【経験】屋根材料の変化は、一般的に社会的な材料の供給の問題と言われたりするが、もっと現実的な問題が契機になっていたということがわかる。



仏壇を取りだす 第8回調査

【事実】民家の中を、住民と一緒に歩きながら裏座に廻ると、仏壇の後ろにあたる壁が壊されていることに気づいた。【経験】仏壇を引っ越したら、壁の板を剥がす、外す風習がある、という(P,W家)。位牌が二つあったので、後ろの板が二枚剥ぎ取られている(W家)。このようなことは、どの文献にも既往研究にも見たことがない。



拡大する報告会 第8回調査

【事実】前日の調査で、家の骨組みを作る時に、仏壇の東側(一番座と二番座の境)の柱(ハヤ)を立ててその柱を拝む(ウートーする)(X家)という左手のご婦人の語りを得た。右手の区長さんと再確認している様子。【経験】報告会・懇親会には、歴代の区長さんらも参加していただき、段々とボトムアップで、筆者らの活動が認知されてきているように感じる。那覇から、わざわざ娘さんが来てくださった方(O家)もある。

図4b 集落の生活の身体的経験2

ような因果関係をもつかを定量的に証明することは難しい。しかしながら、このような語りの採取と生活の経験の積み重ねは、相乗的な効果を発揮することもわかった。第8回の調査の途中で、佇まいのよい民家に遭遇した。石垣は、伝統的な姿のまま、よく手入れされ、家屋も伝統的な形式を残し、ほとんど改造されていない。丁寧に住み続けられてきたさまが感じられ、大きな付属屋とともに、しっかりその場に建っていた。

民家を訪ねてみると、民家の主人は、ウンナーで中心となって三線をひき唄っていた方だった。先方も我々のことを知っていた。そのようなことから、すぐに実測調査への協力が得られ、たくさんの語りも聞かせていただいた。家は見立ての通り、伝統的な形式を最もよく残す民家で貴重な事例(W家)を加えることができた。これは1軒の民家の追加に過ぎないが、追加に至るプロセスは、伊是名での生活の経験の積み重ねがあればこそこのことである。

4. 行為と空間構成の関係が導く事実(空間の特徴)

4.1. 語りの基礎資料と分析

調査の実施

前述の経過を経て、伊是名集落158民家のうち26民家の調査(実測調査、観察調査、語りの採取)を、2014年12月(第3回)、2015年10月(第7回)、2016年3月(第8回)に行った。このうち伝統的な民家で語りを採取できたのは、第3回12民家、第7回6民家、第8回4民家の計20民家である。

本章では、このうち第3回調査で採取した12民家の語りを分析した結果を述べる。

語りのデータと基礎資料の作成

民家で語りを記録したビデオデータを、まず逐次文字起こししてテキストとして抽出した。次に、改めてビデオをよく見ながらこのテキストを単文に切り分けた。単文に切り分けたのは、できる限り解釈を排除できるように考えたからである。チャントやパラグラフといった文の集合が意味をもつばかりでなく、集合を構成する個々の要素にも意味があると考えた。

解釈を避け、テキストを自動分析するツールを利用して機械的に解析することは可能だが、本研究が扱うような個別性が強く量の少ないデータの分析には、大量のデータを機械的に分析し数字のもたらす意味を探る手法は不向きである。実際にこのような方法で解析を試みたが、本研究の方法とはならない

と判断した。

一方、逐次文字起こししたテキストは、語り手が生活する民家で採取したため、語り手、聞き手双方の眼前に語りの対象となる空間が存在する。このため、語りに指示代名詞が多く、また地域独特の言い回しも多い。このことから、逐次文字起こししたテキストのみを頼りに語りを分析するのは難しいと判断した。

そこで、テキストを単文に切り分ける際に、誰もが最低限の文意を理解できるよう、必要な言葉を補うこととした。補う言葉は、テキストに既に使用されている(その文の前後の文に現れる)言葉や、ビデオの映像から誰もが明らかに理解する言葉とした。建築の言葉を用いることで内容がはっきりするならば、それらの言葉を用いた。これらの作業により、逐次文字起こししたテキストを、分析可能な、単文からなる基礎資料として整理した。

4.2. 語りにおける行為と空間構成

基礎資料は、1500あまりの単文からなる。異なる民家の語りを集めて一括りの基礎資料として扱うことについては、沖縄伊是名島の民家、集落における共通した住まい方と変化の傾向がある(大久保ら2015)という前提に立ち、これを可と考えた。

一番座と二番座・雨端

基礎資料の文総数が多く、民家の全体を俯瞰して空間の特徴を導き出すことは容易でない。計算機による自動分析に頼れないことは既に述べた。

そこで本稿では、まず一番座と二番座、雨端を中心とした分析と考察をおこなうこととした。先に理解したように、一番座、二番座、雨端は、沖縄、伊是名の民家の伝統的な空間であるだけでなく、筆者らの集落における生活の経験から民家の生活の大切な場所であることを実感するからである。基礎資料からの文の選出は文の内容を解釈しておこなった。

4.3. 語りが導く民家の空間の特徴

これらの分析と考察を経て、以下の伊是名の民家の空間の特徴を抽出した。この空間の特徴を、住民の語り(部分)とともに表2に整理した。また空間の特徴を解釈し、第一筆者が図式的に描いたものを図5に示した。

1) 一番座の領域拡大(同心円状の広がり)

一番座は、民家の最も大切にされる空間である。しかし、日常生活のために幾つの特徴的な改

表 2 伊是名の民家に見られる空間の特徴

空間の特徴	語りの言葉
一番座の領域拡大 (同心円状の広がり) (a)	A2 一番座は大切なところなので、一番座には直接外部から入らない。 A185 A3 普段は一番座に居る。 F21, F22, L5 A5 男の人は一番座で休む(寝る)。 A217, A218 A6 一番座でベッドで寝る。 C1, L1 S6 一番座は四畳半から六畳に広げたが、二番座は広げていない。 F24, F25 S9 子どもたちが独立してから、一番座南の縁側を、軒先にアルミサッシを入れて部屋にした。 F17, F18, F19, F20, F15 S13 家を拡張したときは、一番座や二番座を拡大するのではなく縁側や雨端を内部に取込むように空間を広げた。 I60 S14 一番座の南は、縁側の柱を抜き、雨端の先端まで室内空間を拡大し、奥行き一間の部屋とした。 I18, I61 S16 一番座南東角の布団入れの収納は、昔はなく、東縁側から南縁側に回って行くことができた。 A191, A192, F16 S19 一番座二番座南の雨端の先端にコンクリートの壁、柱、梁をつくり、二番座南の縁側と一番座南の部屋が追加されたという。 H20, H21, H22, H4 S24 昔は一番座の東側で裏に通じる扉があったが、そこを押し入れにしたので通れなくなった。 H113, H114, H107, C86, C87 S34 一番座の天井は、二番座の天井より高い。 B19
一番座 二番座の 同質性 (b)	A13 お盆など大勢の集まる時は、一番座と二番座にふたつ座卓を並べて使う。 H99, J89, H97, H100 S2 一番座と二番座は欄間で囲われていて、昔から変わらない。 I144, J3 S5 一番座も二番座も四畳半である。 H2, H3 S35 三番座の天井は、一番座二番座に比べてかなり低い。 D81 S39 三番座は、一番座二番座のように座敷と縁側の関係ではなく縁側と一体となった空間(場所)だった。 F34, F35, F83
二番座の 固有性・ 外への 連続性 (c)	A8 お客様を二番座でもてなす。 J55 A10 二番座の仏壇に祖先を祀る。 H17, A69 A12 仏壇に足を向けて寝てはいけないという。 A197 A14 お盆の時などは、二番座を縁側まで広げて、送り盆をする。 H98 A15 改まった時や改まったお客さんは、二番座の前に来たり二番座の前から家に入る。 A163, A176, A178, A179, A184 A15 改まった時や改まったお客さんは、二番座の前に来たり二番座の前から家に入る。 A163, A176, A178, A179, A184 A19 二番座の前にいつもお茶の用意をしている。 B2, A80 A26 ヒメカンの拝みは、二番座の前で門の方向を向いて拝む。 A33 家への出入りは、台所南端と二番座前からしていた。台所南端から二番座縁にも廻った。 C121, C123 S6 一番座は四畳半から六畳に広げたが、二番座は広げていない。 F24, F25 S21 二番座には仏壇があるから、玄関を二番座の前につくるわけにはいかない。 L25, L26
境界の変化 (d)	S14 一番座の南は、縁側の柱を抜き、雨端の先端まで室内空間を拡大し、奥行き一間の部屋とした。 I18, I61 S15 一番座や二番座の縁側の南端にアルミサッシを入れて内部化して、縁側を畳敷きにするなどした。 F26, J2 S19 一番座二番座南の雨端の先端にコンクリートの壁、柱、梁をつくり、二番座南の縁側と一番座南の部屋が追加されたという。 H20, H21, H22, H4 S20 もとともの木造軸組の雨端の先端に柱をたて、RCの梁を一周させて(ハチマキを巻いて)もたせて、開口を大きくとりアルミサッシを入れた。 I39, I149, I151 S59 東側開口部にはアルミサッシを入れておらず、昔のままの雨戸が残る。 A188 S50 家の外周開口部は、ガラス戸と雨戸があった。このような家は、伊是名で一軒だけだった。 C67, C68 S51 南開口部は、現在アルミサッシが入り雨戸はないが、かつて雨戸があったことがわかる。 C27, C32, F1, F4, F5, F6 S51 そのコンクリートブロックの壁は、西側雨はじの壁と一緒につくった。 D49 S53 南側雨端を取り込み内部空間とした。 F2, F3, F7 S56 雨端は高さが低く抑えられていて風土に合っているが、内部の天井も低くなる。 I20, I32, I38 S60 南側開口部の雨戸の内側にアルミサッシを入れた。 F8, F9 S62 南側に座りやすいように縁側をつくる。 F81, G1

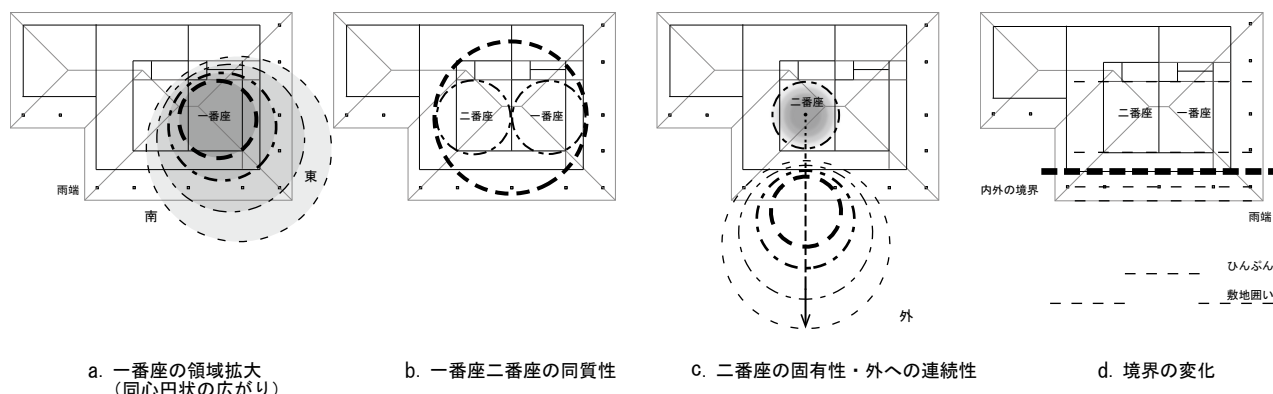


図 5 伊是名の民家に見られる空間の特徴の図示

変も共通して行われる。例えば、縁側を一番座の延長として物置や物干しとして利用したり、縁側や雨端を取り込み新たな室内空間をつくるなどである。布団などを収納する収納場所をつくるような改造もよく見られた。

一番座の領域が、一番座を中心とした同心円状の空間の広がりとして、南東方向へ拡大されていると捉えることができるだろう。この領域拡大は、民家の構造の補強や開口部の改変（アルミサッシュの設置）などとともに行われることが多い。

2) 一番座・二番座の同質性

一番座は、床の間があり客人をもてなす、二番座は仏壇を祀る、というように、二つの座敷は性質を異にする。しかし、普段は就寝のために両座敷とも使われたり、家族が大勢集まる時は二つの部屋を連続してひとつの空間として使う。一番座、二番座だけに欄間があり、天井が張られている、また天井が高い、もともと畳敷きであるなど建築のつくりかたにおける同質性がある。

3) 二番座の固有性と外への連続性

二番座は、仏壇を祀り、死者を横たえるなど、生活の核のような行為とともにある。民家の中心的な位置にあり、改変が最も少ない室である。二番座の変わらない性質を固有性という言葉で表現した。

一方で、いひゃじゅーての設えや人を迎え縁側でもてなす行為（図4）、お彼岸やヒヌカンの拝みは、二番座から外（庭・集落、その外）へと空間が広がるさまを感じさせる。ウンナーのムラガーイの民家訪問（図4）は、規模の大きい、いひゃじゅーてのようにも捉えられる。二番座の前は玄関のない伝統的な民家においては出入りの場所でもある。

このように、二番座は家の核のように重要な空間であると同時に、家が集落の空間や人びとにつながる接点として重要な役割を担っていると捉えられそうだ。

4) 境界の変化

最後に、民家の境界の変化を特徴としてあげたい。伝統的な民家は、開放的なつくりで、開口部には雨戸が設えられるだけだった。絶対的な境界があるというより、屋根の庇や柱、雨端の空間、縁側、雨戸、障子、欄間などの多層の空間や設えで、民家の内外は柔らかく隔てられていた。

現在では、多くの民家で、まず家の南面にアルミサッシュを入れて、民家の内と外をしっかりと区切るようにしている。さらに、1) で述べたように、屋根

や庇の構造体の補強のために、雨端の先端にコンクリートブロックや鉄筋コンクリートの壁や柱を設置するというように、新たな強い境界を構築するさまが多く見られる。総じて、境界は、より単純で強いラインで描かれる、効率的なあらわれとなりつつあると理解される。

5. まとめ

フィールドにおける生活の経験から、生活者の語りを通して得られる民家の空間の特徴を抽出しようとするプロセスを議論し、プロセスから導かれた民家の空間の特徴を示した。

参考文献

- [1] 川喜田二郎, (1967) “発想法”, 中央公論新社
- [2] 金海梨, 高田光雄, (2015) “韓屋におけるチェとマダンのつながりに対応した住生活の特徴に関する一考察 (韓国現代文学作品『庭の深い家』を対象として)”, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 80, No. 718, pp. 2763-2770.
- [3] 野村孝文, (1961) “南西諸島の民家”, 相模書房
- [4] 大久保崇・藤井晴行・篠崎健一, (2015) “沖縄伊是名集落の空間構成への住意識の現れ - 空間図式と建築の実体との結びつきに関する研究 その1-”, 日本建築学会大会学術講演梗概集
- [5] 坂本磐雄, (1989) “沖縄の集落景観”, 九州大学出版会
- [6] 篠崎健一, 藤井晴行, 片岡菜苗子, 加藤絵理, 福田隼登, (2015) “空間図式の身体的原型の実地における空間体験に基づく研究 (写真日記を基礎資料とする KJ 法の試み)”, 認知科学, Vol. 22, No. 1, pp. 37-52.